

レッツ誕生からたけし文化センター、アルスノヴァへの軌跡

NPO法人クリエイティブサポートレッツ 理事長 久保田翠

レッツ設立のきっかけ

「障害があっても普通に子育てがしたい」「できないところではなく、いいところ、出来るところをのぼす場」「日ごろできないことが思いっきりできる場所」の実現として、2000年、クリエイティブサポートレッツは、7人の障害のある子どものお母さん達と始めました。

わたしは、一人の社会人として、建築デザインの仕事を一生続けていきたいと思っていました。しかし、障害のこどもがいるがゆえに、保育園にも、学童保育にも預けることができませんでした。自分が社会に出るためには、子どもを預かってもらえる場所が必要でした。しかし、子どもが行くところがなく、家族が支えなければいけない状況の中で、よっぽどの理由がないかぎり、母親は社会参画できないのです。これだけ豊かで、選択の自由がある日本社会の中で、障害のある子どもがいるだけで、子供や家族や、母親の人生の選択肢が狭められてしまいます。まずは、障害のある子どもが幸せになる場所をつくろうと思いました。子どもが幸せになれば、母親も幸せになります。家族も安心して、「社会」とつながることを考えていこう。そんな想いを秘め、立ち上げたのが、クリエイティブサポートレッツです。

ボランティア団体から NPO 法人化へ

設立当初はボランティア団体として出発しました。無償で場所を提供して下さる方がいて、そこを拠点に、70家族が登録会員になり、いろいろなイベントや講座を手弁当で行ないました。私は芸術大学を出ていたので、絵画や造形にはそれなりの知識と経験がありました。また、エイブルアートに出会って、障害のある人の創造活動のすばらしさを知る機会にも恵まれたことから、この場を「表現活動の拠点」とすることにしました。絵画、造形、音楽、パフォーマンス等の表現活動の講座を運営し、その参加費や授業料で運営を行ないました。

講座には障害のある子どもだけではなく、その兄弟が参加するようになりました。障害のある子がいると、兄弟も思うようにいろいろな場所にはいけなくなります。レッツのように、気がねなく障害のある子どもを連れてきて、兄弟は講座に参加し、障害のある子どもは自由に遊び、お母さん達は気兼ねなくおしゃべりに講じる…、そんなみんなが安心できる場所が実現していたと思います。

子どもの成長とともに、ニーズは変わっていきます。障害のある子どもとともに、兄弟と母親と一緒に動ける時代は、実は結構短く、せいぜい小学校までです。兄弟も部活が始まったり、塾に行くようになると、送り迎えなどで母親は忙しくなります。ほ



かの兄弟の教育費もかかり始めると、障害のある子供が絵を描いたり、音楽をやる余裕はなくなっていきます。

障害のある子どもは、将来に夢が描けません。小学校を卒業すると「どこに就職するか」「どこ
の施設に行くか」といった現実的な問題で、母親は頭がいっぱいになってしまうのです。設立当
時の7人の仲間は、大人になってから入るための施設をつくるための運動に変わっていかれる方、
兄弟の受験、親の介護など、いろいろなことでレッツから放れていきました。結局残っていたの
は私一人でした。

2003年、9月、無償で提供される場を去ることにもなり、そこそこ広くて、音を出してもよく、
駐車場もある、家賃15万円の佐鳴台に引っ越しました。

ある日、いつものように夕方の講座があり、スタッフが足りなかったので、サポートに入りました。
たけしがいると仕事できません。仕方なく、建物の目の前にある駐車場に車を停めて、
チャイルドシートで固定して、彼の好きなビートルズを流しっぱなしにして車に閉じ込めて仕事
をしました。1時間ほどたってしまっ、もどつてくると、チャイルドシートを滑りぬけ、ナン
ト本人も車も、どこもかしこも、便を塗り手練った状態となっていました。異臭の中で本人は、
嬉々と満面の笑顔であそんでいました。この異様な光景に愕然としながら、「私は何をやってい
るんだらう・・・」と本当に情けない気持ちになりました。

結局、講座収入だけで、アルバイトを雇い、家賃を払うのは、難しかったのです。自分の家族
にしわ寄せが行くのは、子供たちの幸せな場所を作るポリシーから離れていきます。この事件を
きっかけに、ここをたたみ、活動場所を自宅に持つていくことにしました。同時に、大変な子育て
を抱えている障害の子どものお母さんたちで活動を継続させていくことは難しい。レッツを継
続させるのであれば組織化していくしかない。2004年年2月、クリエイティブサポートレッツ
はボランティア団体からNPO法人になりました。

アンサンブル江之島と障害者

自宅での職住近接の活動は非常に都合よく、ちょうど多感になりだした長女にも、「お帰りな
さい」を言える環境には、家族のささやかな安定がありました。しかし、家庭の安定とは裏腹に、
レッツに通う子どもの数は激変し、多くの会員が離れていきました。

そんな時に、理事から、浜松市の沿岸にある保養施設が市に払い下げられ、そこが福祉センタ
ーになり、1階で、喫茶店運営しながら地域の人たちが交流できる事業を行なえるNPOを探し
ているという情報をいただきました。早々企画書を書き、プロポーザルに望みました。運よく当
選し、2005年アンサンブル江之島1階の厨房完備の、300㎡の元食堂に拠点を構えること
になりました。

アンサンブル江之島は6階建ての建物で、各フロアに、知的障害のグループホーム、精神障害
のグループホーム、知的障害者のデイサービスと学童保育、精神障害者の作業所、障害の相談事
業所が各フロアにあり、それを別々の法人が運営する福祉ビルです。ここで、一般の人たちが立
ち寄れる喫茶店とアートを運営することになりました。ただし他の法人と違って、あく



までも自主運営が条件でした。

今までなるべく人目のつくところで活動を行なってきました。それは障害のある人のイメージを変えたい、障害のある人が存在することを、社会に認識してもらいたいという思いがありました。しかしアンサンブル江之島は浜松市の南の遠隔地にある、障害のある人とその関係者しかいないビルです。ここでの活動は、障害のある人の負のイメージと社会的疎外感をどう払拭していくのかが、大きな課題となりました。

助成金と活動の広がり

アンサンブル江之島では障害に関係のない若いスタッフ2名を雇うことにしました。そこで必要になるのが資金です。畑と田んぼの中にポツンとあるこのビルは喫茶店では到底やっていけない。そこで、応募を始めたのが、民間の助成金です。今までの経験から感じているさまざまな社会的な問題を整理し、「食とアートのグローバル発見プロジェクト」として、フィリップモリス株式会社の助成金に応募し、実行できることになりました。

この助成金の特徴は3つの段階があり、最長6年間のプログラムを行なうことができることです。第1ステップは立ち上がり助成。今後のことも考えながら事業を1年間で立ち上げます。その結果から審査を通り、第2ステップである2年間の継続助成に進みます。その後1団体だけが最長3年間の特別助成にを受けることができます。全国300以上の応募の中から立ち上がり助成で、13団体が選ばれ、1年後の審査の結果、継続助成は6団体に絞られ、最後の特別助成は1団体に絞られていくのです。レッツはこの最後の1団体に選ばれたのです。フィリップモリス株式会社の助成はまさにレッツがたけし文化センターといったコンセプトにたどり着き、そこから障害福祉施設アルス・ノヴァ、DotArts 構想へと繋がる土台となったのです。そのほかにも、ファイザー株式会社（2006年～2008年）、障害者高齢者福祉機構（2005年）などにも応援をいただき、活動が円滑にできる環境ができました。

立ち上がり助成では、アンサンブル江之島を基点として、事業を行ないました。地域の方から畑を借りて作物を作り、食を通しての交流を行うことを目的としました。音楽家片岡祐介氏との公民館祭りへの音楽ワークショップの実施、外国人の多く住む江の島団地へのゲリラ的ワークショップの開催、地元の小学校と隣接する浜松特別支援学校との交流学習の実現、交流学習にアーティストを派遣し障害のある子ども、ない子どもと一緒に作品を作り、それを、アンサンブル江之島の隣に建設中の区役所工事現場の仮囲いにデザインなど、考えられることを精力的に実行してみました。1年の立ち上がり助成にしては盛りだくさんの内容を行ないました。

こうした助成金事業を行なうようになって、障害のある子どもに向けての、講座がメインだった活動から、障害のある人を含めた人たち、特にマイノリティーといわれている人たちの状況を

アートを通して社会に伝えていくといった活動へと変わって行きました。反面、障害のある人しかいないアンサンブル江之島の中で、障害のある人の社会的イメージを払拭していくことは、非常に難しく限界を感じ始めていました。

障害者だけが集まるこうしたビルは、当時者やそれを支援する人たちにとって安心感がありますが、それは、自ら社会との距離をつくっていることにもなるのです。多少、社会との摩擦や違和感を引き起こしたとしても、自ら外に出る勇氣を持たないといけないと思います。そこで、事業の舞台を、アンサンブル江之島から、人々が多く集まる中心市街地へと変えていくこととしました。



商展 06

商展 06 とは、2006 年 11 月、12 月の約 1 ヶ月、浜松市ゆりの木通り商店街 15 店舗、静岡市紺屋町商店街 12 店舗に、障害のある子どもの作品を「潜ませる」展覧会です。商売の舞台である「商店」に、障害のある子供達の営みを伝えると「展示」を行なうことで、「商展」と命名しました。同時に、ハンディのある子どもの存在を社会に知っていただくこと、中心市街地の活性化の一助にもなっていくことを目的に行ないました。

これは非常に好評で、多くの反響がありました。(具体的には動員数、新聞テレビの取材数が江之島町とは大きく違いました)。

商展は、中心市街地にレッツが始めて打って出た事業でした。これをきっかけに、浜松市のゆりの木通りさんとのお付き合いが始まり、現在に至っています。その伝え方を「作品」に置き換えたことは、解りやすさはありませんでしたが、しかし、障害の面白さや偉大さ、おかしさを伝えるにはどうしたらいいのだろうといった課題が残りました。つまり、障害は、「作品」では伝えきれないと思ったのです。



展覧会ではさまざまなトラブルもありました。「障害者の作品だから置く」という商店と、「障害者の作品だから置かない」という商店に分かれてしまったのです。こちらとしては、障害者の作品だから置いてくださいとお願いしたことはなく、「作品として気に入ったら置かせてください。もしお客さんに聞かれたら、説明していただければありがたいです」とお願いしたのです。あくまでもお客さんとのコミュニケーションツールとして役立ててほしいといった趣旨であったのですが、「障害」という固定したイメージが先行してしまうのです。

これは「障害」を背負うレッツの宿命ではあるのですが、私たちがやることは「偽善」ととられることも多くありました。思いが正しく伝わらないジレンマは続きました。



浜松アートフォーラム 2008

そこで、障害からはなれて、アートそのものが持つ力を検証する事業を行なうことにしました。そこで起草したのが浜松アートフォーラム 2008 です。

このプロジェクトは、障害にフォーカスするのではなく、アートそのものの力を議論する場にしました。そこで「地域にアートができること」をテーマとし、市民に向けて「一緒に考えましょう」と呼びかけていったのです。この頃、新潟で行なわれている「大地の芸術祭」の、アートが地域を再生していく姿に感銘を受けました。なもない市民が、アート（作品やアーティスト、共同作業）を通して生き活きとしていく状況は、私が以前関わっていた街づくりではなかなかできなかった人の気持ちをつむぎ、再生していくことを、アートの手法を持ち込むことで実現できる事実は、私にとって、衝撃的でした。

そこで、浜松地域においても、レッツがテーマとしている、障害のある人を含めた、人と人とのつながりの再構築を、アートを通して実現してけるのではないかと思います。そうしたきっかけを作りたいと思い、浜松アートフォーラムを行ないました。

フォーラムと鴨江別館

その頃、丁度、浜松市の 1928 年築の歴史的建造物鴨江別館の取り壊しの話が浮上していました。浜松市は戦争で大きな空襲に何度も襲われ、戦前の建物がほとんど消失してしまっています。また戦後工業の街として、世界的企業を多く排出したエネルギッシュな街ですが、同時にスクラップビルドを好む傾向が強くありました。その中で生き残ってきた鴨江別館を、たいした議論をすることなく取り壊しを決め込んでいる市民に、一石を投じたいという思いもありました。



そこで、鴨江別館を会場として、建物を題材としたアートイベントに仕立て、市民に向けて「アートの力」の議論をここで起こしたのです。レッツの会員でもある北川フラム氏をお招きして講演会とシンポジウムを柱に、鴨江別館を丸ごと使った音楽イベント「照明の音楽」(野村幸弘演出)や、建物をメインにした写真展、資料展、インスタレーション、ワークショップ等を企画して、10 日のイベントとしました。メディアにも取材いただき多く反響がありました。その後、鴨江別館は、建築士会さんや、市民の運動にも繋がり、2008 年 10 月に、保存が決定し、アートセンターとなることが決まりました。

まさに、「地域にアートができること」が実証されたわけですね。

障害かアートか

フォーラムは、どちらかという、アートを嗜好している人たちの中で話題が広がっていきました。それは、レッツが抱えている切実感とは違い、アートを高尚な趣味としてとらえる傾向の人々に、評価を受けることになりました。しかし、レッツが、障害のある人たちのことを基軸にしながら事業を展開していることには、違和感を抱く人が多くいました。「アートをやりたいのか、障害者のことをやりたいのか」、「アートのために、障害者を利用している」はたまた、「障害者のためにアートを利用している」という声に本当に困惑しました。

アートには、社会の中の様々な問題、あるいは個人的な問題、苦しみ、悲しみに対して、一条の光を指示す力がある。それですべての問題が解決するわけではないが、少なくとも、人が明日を生きようとする力になる。また、固定化してしまった価値観、慣習に代表される様々なルールにがんじがらめになってしまった人や、そこから疎外されてしまう人たちに対して、新しい関係性を構築していく、起爆剤、連結剤にもなるのである。こうした考えに至ったのは、最初にも書きましたが、私が、久保田壮との生活、障害に直面しながら、私たちが生きていくうえで、アートでしか、解決ができなかった様々な事象に基づいています。

だから、「アートなのか障害なのか」と問われても、「それは同じであり、一体である」としか言いようがありませんでした。

アートの概念の曖昧さ

2009年ごろから、鴨江別館がアートセンターとしてどのようにあればいいかといったことを、アートセンターに興味のある市民と議論の機会を設けていきました。

しかし、議論は、全く深まることはありませんでした。すでに、建物があり、アートセンターと決まったのだからその中に何を詰め込んでいったらいいかと言った議論に終始し、いつまでにどういった整備をして、お金がこうで・・・といったところばかりに話が及んでいきます。

「優れたアーティストが作り出すものがアートであり、それを展示するのがアートセンター。美術館よりも敷居が低く多くの市民が発表の場としても活用ができるアートセンターがいい」

「それでは普通の美術館とも、公民館ともかわらない。そうではなく、この地域にアートを必要としている人はたくさんいて、その人に届くようなアートセンターにしたい」「レッツは障害のある人の作品を扱うアートセンターを作りたいのか」「そうではなく、また障害や作品にこだわるのではなく、いろいろな人が存在することから始まるアートセンターを作りたい」

「それは福祉でやればいい。障害のある人の作品も含め、一般の人が作る稚拙なものをアートとってほしくない」「アートは優れたアーティストが作り出すものであって、アートセンターはそれを振興する場所である」といったような議論が繰り返し展開されていました。

アートセンターとは場所があれば成立するものではなく、アートセンターは事業体であり、それを運営し



ていく組織である。社会的なさまざまな課題を解決していく一つの手法としてアートを基軸に事業を起こしていく。あるいは、普通の市民が持っている、自分でも気がついていない発想や表現を引き出したり、それらを基に、誰かと何かをつないで、全く違った世界を作り上げる……。そうしたことをプロデュースしていくのがアートセンターである。

議論は物別れの状態で、結局、2010年に鴨江別館アートセンターの議論から、離脱することにしました。同時に、レッツが思っているアートセンターを自分たちが現実にやっていくしかないと思いました。実際にやってみて、事業を起こし、繰り返し、議論をしていく。自分たちが思うアートセンターを、自分たち自ら総括する方向へとシフトしました。

たけし文化センター

そうした渦中の中で導き出されて行ったのが「たけし文化センター」です。たけし文化センターは、障害とアートと、別れてしまいがちな概念に、1つの解答を与えてくれたのです。

たけし文化センターBUNSEUDO（たけぶん）

たけし文化センターは重度の知的障害のある「久保田壮（たけし）」という個人を全面的に肯定することを出発点にコンセプトを作り上げた、公共文化施設です。カフェがあり、創作スタジオがあり、ワークショップの場所があり、コンサート会場があり、基本的な機能は他の文化センターと同じです。公共に開かれた施設というところでも、他の施設と比べてなんらかのわりはありませんが、さまざまな人たちを受け入れるという点は、常時最優先事項とします。しかしすべての基準が「たけし」基準で設置してありますので、土台のところで「普通の公共施設」のルールとはすべて異なります。そのルールの多くは明言化することができません。なぜならそのルールの多くは個人個人のそれぞれの関係や、願い、利用方法によるところが大きいからです。



たけし文化センターは、利用する皆さんすべてのための施設です。ゆったりくつろぐのもよいですし、ここでなにか始めてみたい、発表したいという希望にこたえることもできます。

たけし文化センターでは、是非あなた自身に、それがそのままであることを納得していただきたいのです。（2008年たけし文化センターパンフレットより）

現在のたけし文化センターは、1つの場を作るのではなく、さまざまな施設に付帯して、そこをたけぶん化していくことを目的としています。また、たけし文化センターのたけし基準は、くぼたたけしの「好きなところをやりきることをコンセプトとしていますが、それは、



そこを担当するディレクターが、そのことを理解し、ディレクションしています。

たとえば、2010年から始まった障害福祉施設アルス・ノヴァには、たけし文化センターARSNOVAがあり、これが場を持っているのではなく、アルス・ノヴァをたけぶん化する事業を行なっているのです。閉じてしまいがちな福祉施設を、さまざまな方法で開いていくことで、地域の創造拠点として社会資源化していく試みを、アルス・ノヴァを舞台に、たけし文化センターARSNOVAがコーディネートしていくのです。



障害福祉サービス事業所 アルス・ノヴァ

たけし文化センターとアルス・ノヴァ

現在レッツはたけし文化センター事業と、障害福祉サービス施設アルス・ノヴァを運営しています。アルス・ノヴァは2010年4月からスタートしました。

2000年に設立してから、私は、福祉施設を作りたいとは思ってきませんでした。レッツは「共に生きる社会の実現」「誰も排除されない」「人として認められ大切にされる社会」を理念として掲げていました。それゆえに福祉施設を作ることは、むしろ、障害という限定的なイメージを作り出すことにつながり、理念を達成できると思えなかったのです。



しかし個人的には、たけしのような、指示に従うことができない子は受け入れ先がなく、高校卒業後の進路はほんとうに困っていました。

障害のある人たちが自分を大きく変えることなくいることができる場所、障害からくるさまざまな行為を「表現」ととらえなおし、そこからその人の本質を追及していく施設。そんな施設があったらいいとは思いながらも、社会的な障害の強烈なイメージに飲み込まれることを恐れていたのです。

しかし、2008年、たけし文化センターの実験事業が始まり、理念に基づいた様々な事業を作り出している事業体として活動し始めたころから、その1つの事業として、福祉施設を作ることが可能であると思いました。

アルス・ノヴァは、国の定める法定施設です。NPO法人クリエイティブサポートレッツが運営母体ですが、概念としては、アルス・ノヴァという障害者サービス施設のマネジメントとプロデュースをたけし文化センターが行っているのです。

たけし文化センターも、アルス・ノヴァが障害に特化した事業を行なう環境が整ったことで、レッツの理念に基づく、障害に関係のない、様々な課題、様々な人たちのための事業を展開することが可能となりました。

2010年からたけし文化センターは、長年温めてきたアートセンター構想を整理し、「アートセンター構想 DotArt」を展開しています。2011年6月から中心市街地でたけし文化センター「INFOLOUNG」を行い、レッツが考えるアートセンターを着々と実現しています。

事業としてのたけし文化センター



2008年から始まったたけし文化センターは、文化・芸術による福武地域振興財団、フィリップモリス株式会社、ファイザー株式会社、アサヒアートフェスティバル、浜松市、浜松市文化振興財団などの助成を受けて、事業を展開してきました。助成金は、ビジネスでいうところの融資です。返却義務はありませんが、その事業がどのように展開され、どのような効果を生んでいるのかを問わ

れます。活動を支えていくのは、「人・モノ・金」とよく言われます。特にNPOがその活動の性格として最も苦勞するところはお金の部分だと思います。事業は継続性が重要です。毎年助成金でつないでいくのは容易なことではありません。レッツの活動においても、これが大きな課題でした。

2010年からアルス・ノヴァを運営に着手しましたが、これによって、障害のある人の拠点とそれを支える人材を確保し、そして最低限の活動場所と必要経費を捻出できる環境を手に入れることができました。福祉部分が確立したことは、たけし文化センターの理念を明確に打ち出すこと



を容易にし、活動がよりクリアになってきました。

そして次なる課題は、たけし文化センターが、その理念を実現しながら、いかにビジネスモデルを作り上げていけるかです。現在、進めている、「アートセンター構想 DotArts」は、理念としても成立させながら、ビジネス化していくことにも挑戦しています。

これから

東日本大震災、そして震災だけではなく、福島第一原発の問題などは、生活のあり方や、人と人との絆の大切さや必要性が多くのところで見直されていくきっかけとなりました。そうした、時代の変化の中で、熱意をもって取り組み、真摯に生きている人たちの存在を、無視しないで大切にできる社会に変わっていくと思います。その中で、たけし文化センターの試みは、とても必要なことになると感じています。レッツは、苦悩する一人の母親が重い障害のある子どもとの生活の中から、家族が幸せになることを夢見て始まったささやかな団体です。そして、今後、幸運にも、事業が拡大していったとしても、一人ひとりと大切に思い、その可能性を信じる目線を失わないでいきたいと思います。そして、NPOとして、自分たちが住むこの地域が、幸せと感ずることができる地域になるように、努力していきたいと思っています。